

朋誠堂喜三二作『新建立 忠臣蔵天道大福帳』論

——「天道」に関する考察——

古庄るい

〔キーワード〕①黄表紙 ②朋誠堂喜三二 ③山東京伝 ④天道 ⑤天帝

* 本稿での黄表紙本文の引用については原文を読みやすくするため、以下の基準に従った校訂文を載せた。

イ. 原文には適宜句読点を補った。

ロ. 送り仮名や仮名遣いは原文のままとし、平仮名には適宜濁点をつけた。

ハ. 平仮名は適宜漢字に変換し、原文で平仮名であったところは漢字のルビとして表記した。

はじめに

黄表紙は十八世紀後半に登場した大人向けの絵本文芸である。物語には当時の風俗、事件、昔話や古典文学などの様々なパロディーが取り入れられており、荒唐無稽な筋立てとなっているのが特徴である。そうした物

語では、既存の物語の登場人物が用いられることも多く、人だけでなく、擬人化された動物や道具、食べ物など様々な登場人物が活躍する。なかには他の黄表紙に描かれた登場人物を別の作者が自らの作品に用いることもあったようだ。

ある黄表紙に登場した者が他の黄表紙にも引き継がれていく。その過程を見ることは、作品ごとに積み重ねられた登場人物のイメージ像や戯作者間の関係性など、物語背景への理解を深めることに繋がるだろう。

本稿ではその一例として、朋誠堂喜三二作、北尾政美画『新建立忠臣蔵あらたになつら』天道大福帳てんどうだいふくちょう（葦屋板、天明六年（一七八六）刊）の「天道」を中心に、呼び名と図像の関係性から〈天の主宰者〉像について述べる。

『天道大福帳』は「天道」と天人らが下界の人々の善行によって天に登る金銭を管理する物語設定のもと、歌舞伎狂言『仮名手本忠臣蔵』⁽¹⁾で繰り広げられる出来事を天界の視点から描いた作品である。下界（＝仮名手本忠臣蔵）の筋はそのまま活かしつつも、天界を俗に描いており、天人らの失敗や天界の金巡りの都合によって下界の登場人物たちの行動が操作されるところに笑いがあるとされ、魅力となっている⁽²⁾。

本作は刊行当初から売れ行きが良かったようで、翌年刊行の『龜山人家妖』（天明七年（一七八七）刊）序で「当春の大福帳は、とんだ評判がよござりまして、有難うござります」とあることから評判ぶりがうかがえる。また、寛政六年（一七九四）には再摺再板で、享和三年（一八〇三）には『繪本東大全』初篇第四冊に『よめいり』との合綴三摺再板で刊行された他、『繪本国土産』⁽³⁾刊行年不詳）所収再板のものが出され、馬琴著『近世物之本江戸作者部類』（天保四（六年（一八三三）三五）成立）には、喜三二の代表作の一つとして挙げられている⁽⁴⁾。

本作中では天道や天人が描かれる他、天界を舞台とすることから、「九曜」や「七曜」、「二十八宿」といっ

た天文用語も取り入れられている。喜三二がこういった「天」の要素を作中に取りこんだ背景には、庶民の「天」に対する関心の高まりが関係していたようだ。

先行研究によると、当時の江戸では、金銀星の出現の噂（安永九年〔一七八〇〕七月）や司天台の浅草移転（天明二年）、月食（天明三年八月）や日食の予報（天明六年正月）など、天文に関する現象、事件が次々と起こったらしい。その他にも、安永九年九月中村座で上演された尾上梅幸名残狂言『忠臣名残蔵』中に、五世團十郎が「中村座の金銀星其餘光の星あかり」と口上を述べたことが発端⁶⁾となつて、その年以降「星物」の戯作が多くなつたことが指摘されている。棚橋正博氏は「安永末年から天明初年にかけて、打ち続く天候不順、大地震、浅間山噴火といった異常気象が占星術とか雲気・天文といったものに対する江戸庶民の興味や好奇心を増幅させずにはおかなかつたはずである」と述べる⁷⁾。

また、このような天文ブームとは別に、当時流行していた心学⁸⁾が戯作にも影響を与えたことで、『天道大福帳』や山東京伝作『心学早染艸』（寛政二年〔一七九〇〕刊）のような、天界の者が人間の行動や心理を監督するという趣向の黄表紙も出された。そして、このような趣向の作品、あるいは天界を舞台にした作品には、一章で示すような天界を統べる天の主宰者的存在の登場人物（以降、〈天の主宰者〉と記す）がしばしば描かれるようになったのである。

なかでも、『天道大福帳』の「天道」は日輪を擬人化したような強い印象を与える図像であつたからか、〈天の主宰者〉の代表格として後続する黄表紙に幾度も描かれた。しかも、そのように繰り返し用いられたこと自体が話題となつて、次のように作中の地の文や台詞に取り上げられることもあつた。

「留守だく」といふ内に、ずっと入る三人連れは、思ひもよらぬ天道様と竜宮の親玉難陀龍王、地獄の大閻魔大王なり。近年草双紙に度々道具に使ふ故」⁽⁹⁾

式亭三馬『式亭三馬自惚鏡』享和元年(一八〇二)刊(三丁ウ)
 「喜三二の天道大福帳よりこの方、戯作者が切なくなると天道様を道具にしてるが」⁽¹⁰⁾

式亭三馬『親讐勝負』文化二年(一八〇五)刊(三丁ウ)

また、〈天の主宰者〉ではないが、『心学早染艸』の善魂悪魂も『天道大福帳』の「天道」の影響を受けたと言われている。⁽¹¹⁾

したがって、先述した筋そのものの面白さに加えて、作中に登場する「天道」の存在は本作の魅力を語る上で重要な位置にあったといえよう。その誕生については、棚橋氏が『心学早染艸』の「天帝」との関係から次のように述べる。

天帝ではなかったが、まるで人間とおなじような恰好でお天道様を登場させた黄表紙は先にもあった。天明四年に刊行した山東京伝の黄表紙『天慶和句文』(京伝自作、自画)がそれである。日輪を後光のようにかざした表情豊かな人物として、お天道様を京伝は画いていた(中略)。

それをこんどは朋誠堂喜三二が黄表紙『天道大福帳』(天明六年刊。北尾政美画)で、そのまま借用した(中略)。

このようにお天道様が擬人化されていたところへ、お天道様にかわって天帝が擬人化され描かれたのが

『心学早染艸』だった⁽¹²⁾

この指摘を踏まえて、『天道大福帳』の「天道」が喜三二と政美による独自の発想から生み出されたものではなく、京伝の影響によったこと、さらに京伝もまた喜三二らの影響を受けたことを考慮すると、〈天の主宰者〉像の造形にはいくつか段階があったと考えられる。ただ、先行研究における「天道」と「天帝」に関する言及は少なく、そもそも黄表紙に登場する「天道」と「天帝」の識別についても明確にされていない。

そこで、実際に「天道」や「天帝」といった〈天の主宰者〉が登場する黄表紙の作例を複数集めて比較したところ、呼び名と図像に一定の関係性を見ることができた。

以降、『天道大福帳』と『心学早染艸』両作品の作者である喜三二と京伝が、それぞれ〈天の主宰者〉に関してどのような戯作意識をはたらかせていたのか、また、『天道大福帳』の「天道」が人々を魅了した要因はどこにあったのかを述べる。

一、「天道」と「天帝」の比較

本章では〈天の主宰者〉が登場する黄表紙を複数取り上げ、図像と呼び名の比較を行っていくが、その前に天道と天帝の語義の違いについて、当時の認識がどのようなものであったか少し触れておく。

まず、天道についてである。今回調査した中で唯一、天道と天帝が共に立項されていた『日葡辞書』本篇（慶長八年（一六〇三）年、長崎学林刊）には次のようであった。

Tento. テンタウ (天道) Tendo Tennen michi (天の道) 天の道。すなわち、天の秩序と摂理と。すでにわれわれはデウスをこの名で呼ぶのがふつうであるけれども、ゼンチヨ (genios 異教徒) は上記の第一の意味「天の道」以上に考え及ぼしていたとは思われ⁽¹³⁾ない。

これによると、天の秩序や摂理そのものを示す「天の道」という一義のみである。その他、「Tendo. テンダウ (天道)」という項目もあって「天空の上、または、空⁽¹⁴⁾」と説明されているが、いずれにしても『天道大福帳』の日輪を擬人化したような「天道」に結びつく太陽の意味はまだなく、「天の主宰者」としての意味もキシタンに限って認識されていたようである。それから少し時代が下るが、伊藤仁斎『童子問』巻の中(元禄四(一六九二)年稿本成立)には「天下の王たるときは、則^{すなはち}天下の天道^{てんたう}為り、一国に君^{きみ}たるときは、則^{すなはち}一国の天道^{てんたう}為り、一家の主^{しゅ}為るときは、則^{すなはち}一家の天道^{てんたう}為り」とあって、それぞれの主宰者が「天道」に例えられている。つまりこれは、天道が「主宰者」の意を持つようになったということであり、当記述は『天道大福帳』の「天道」につながる思想がこの時には存在していたことを示す例といえよう。

ちなみに、安部清哉氏によると「日輪・太陽が文章語とするなら、近世に多用されるようになる太陽の意を持つ天道は、後述するように口語的性格の語⁽¹⁵⁾」であり、太陽の口語的性格の語として「天道」が台頭してくるのは十八世紀ごろからだという。

実際、谷川士清編『倭訓栞』巻之十七(安永六年〜明治二〇年〔一七七七〜一八八七〕刊)には、

てんたう 俗に天一日を天道といひ伊勢の外日神を祭るを天道といふは浮屠氏の天道大日の称に
よれる也⁽¹⁸⁾

とあって、天道において天照大御神の他に天道を太陽神とすることや、それが大日如来に由来することが説明されている。

一方、天帝については、『日葡辞書』に「天帝 Teno micado (天の帝) 国主。また、デウス (Deos 神)」とあり、天または国の主宰者を表す語として説明されている。また、本居宣長も『玉くしげ』(天明七年成立)の中で次の例のように言及している。

抑天地は一枚にして、隔なければ、高天原は、萬国一同に戴くところの高天ノ原にして、天照大御神は、その天をしるしめず御神にてましますば、宇宙のあひだにならぶものなく、とこしなへに天地の限をあまねく照らしましくて、四海萬国此ノ御徳光を蒙らずといふことなく、何れの国とても、此大御神の御蔭にもれては、一日片時も立ことあたはず、世ノ中に至て尊くありがたきは、此ノ大御神なり。然るを外国には皆、神代の古伝説を失へるが故に、これを尊敬し奉ることをばしらずして、(中略) 外にあるひは唐戎国にては、天帝といふ物を立て、上なく尊き物とし、其余の国々にても、道々に主として尊奉する物あれども、それらは或はおしはかりの理を以ていひ、或は妄に説を作りていへる物にして、いづれも皆、人の仮に其ノ名をまうけたるのみにこそあれ、実に天帝も天道も何も、あるものにはあらず⁽²⁰⁾

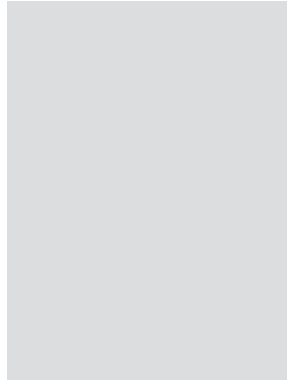


図1『天慶和句文』
2巻5丁オ
国会図書館蔵

宣長は本来、至上最も尊い神は天照大御神であるにも関わらず、その概念は異国の説によって歪められ、新たに入ってきた天帝や天道といった「人の仮に其名をまうけたるのみ」の「実もなき物」である天地の創造主や理²¹⁾を信奉していると批判しているのである。宣長の主張内容はともかく、この記述から、天照大御神に限らず天帝の名も当時江戸において一般的に天を司る至上の神として認識されていたことが分かる。

したがって、天道も天帝も共に〈天の主宰者〉としての意味をもつが、天道の方は天帝よりも多義的で解釈も複雑であり、抽象的に捉えられるものとして認識されていたと考えられる。

以上のことを踏まえた上で、ここからは黄表紙の作例から「天道」と「天帝」の違いを見ていく。黄表紙の中で「星物」や天界を題材にしたものは数々あるが、その中で今回取り上げたのは、棚橋正博著『黄表紙総覧』索引篇で「天上界」や「天帝」、「天道様」の項目に載る二十四作品である。本稿ではあくまで「天道」と「天帝」の図像や呼び名に拘って黄表紙における描き分けや変遷を確認していくため、比較対象の範囲は、〈天の主宰者〉の呼び名ではじめて「天道」の名を使った山東京伝『天慶和句文』以降、黄表紙が刊行された文化三年（一八〇六）までの作品とした。そのため、『天慶和句文』より以前に刊行された『通言神代巻』⁽²²⁾（恋川春町作画、鶴屋板、天明三年刊）や『天慶和句文』と同年刊行の『大千世界牆の外』⁽²³⁾（唐来参和作、北尾重政、葛屋板、天明四年）などにも、〈天の主宰者〉に類するような天地創造の神々が登場していたし、安政の大地震後に流行した鯉絵に『天道大福帳』の「天道」と同様の姿が描かれる例も見られるが、今回の比較対象から

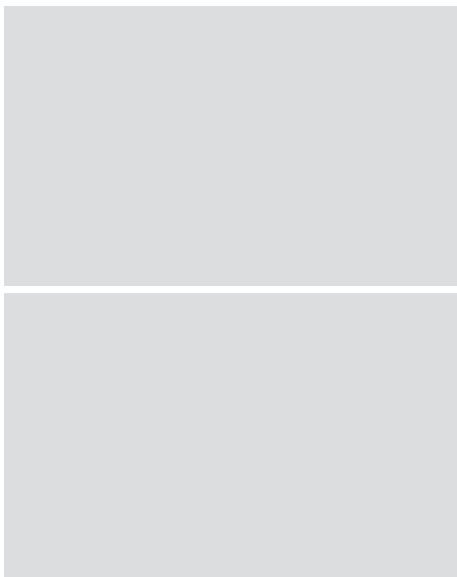


図2『開帳噺』

上図：1丁ウ2丁オ 下図：6丁ウ7丁オ
東京都立中央図書館特別文庫室所蔵

は除いていることを予め断っておく。

また、黄表紙に描かれる〈天の主宰者〉たちは次の例のように、概ね天界の中でも高い地位にあり、下界または天界にいる他の登場人物たちを管理する立場にある。

・四十六人の義士、切腹の後、天道の御計にて、（中略）四十六人の魂をば天へよび給ひ、名高き星の手下に属さしめ給ふ

・そもく天上に天帝と申すたうとき神おわしまして、常に茶碗のやふなものへむくの突の皮のやふなものを水にてとき、竹の管をひたして魂を吹き出し給ふ

（『心学早染艸』一二丁オ）

ただし、作中における役割も含め、具体的な行動や性格については「天道」や「天帝」などの呼び名に関わらず、各作品の趣向に左右されるところも多い。例えば、十返舎一九作画『開帳噺』（西村屋板、寛政十二年刊）には、天上を采配する役は唐土風の姿の「天帝」が登場する（図2一丁ウ）。しかし、これとは別に、宝井其角が三囲稲荷で雨乞の発句を詠んだことを受けて天上で評議する場面（図2七丁オ）においては、『天道大福帳』の「天道」や『心学早染艸』の「天帝」に似た

姿の登場人物も並び描かれている。両者の名前は明示されていなかったため、今回この二人は比較対象から除外したが、特に前者に関しては天気を左右する役上、太陽の擬人化である可能性は高い。だが、本作ではあくまで天気を司る神というだけで、「天の主宰者」とは別に描かれている。このような事情から、今回「天道」と「天帝」の違いを比較するにあたっては内面性についての言及は避け、凶像と呼び名の関係性に限定することとした。

左記の一覧では刊行年代順に①～⑩の番号を付け、() 内には、作者、画工、板元、刊行年を記した。〈 〉内は角書を示している。

〔対象作品〕

- ① 『天慶和句文』(山東京伝、北尾政演、鶴屋板、天明四年刊)
- ② 『へ新建立忠臣蔵』天道大福帳(朋誠堂喜三、北尾政美、葛屋板、天明六年刊)
- ③ 『大仏左捻』(白山人可候、署名ナシ、不明、天明六年刊)
- ④ 『仙伝』延寿反魂談(山東京伝、北尾政演、榎本屋板、寛政二年刊)
- ⑤ 『藍返行義霰』(山東京伝、兎角亭亀毛、大和田板カ、寛政二年刊)⁽²⁶⁾
- ⑥ 『大極上請台売』心学早染艸(山東京伝、北尾政美、大和田板、寛政二年刊)
- ⑦ 『世上洒落見絵図』(山東京伝、北尾政演、葛屋板、寛政三年刊)
- ⑧ 『へのしの書初若井の水引』先開梅赤本(山東京伝、北尾重政、葛屋板、寛政五年刊)
- ⑨ 『大仕掛三界會我』(鹿杖山人、歌川豊国、秩父屋板、寛政五年刊)
- ⑩ 『旨趣向棚牡丹餅』(樹下石上、北尾政美、西宮屋板、寛政六年刊)

- ⑪ 『天道浮世出屋操』（式亭三馬、歌川豊国、西宮屋板、寛政六年刊）
- ⑫ 『善悪邪正大勘定』（唐采参和、北尾重政、蔦屋板、寛政七年刊）
- ⑬ 『へ昔 怪談 諷 教訓 心学晦荘子』（曲亭馬琴、北尾重政、鶴屋板、寛政七年刊）
- ⑭ 『雷門再興』御膳浅草法』（十返舎一九作画、岩戸屋板、寛政八年刊）
- ⑮ 『加古川本蔵綱目』（曲亭馬琴、北尾重政、鶴屋板、寛政九年刊）
- ⑯ 『天運循環』実生金采花鉢植（已成金）』（樹下石上、歌川豊国、西宮板、寛政十年刊）
- ⑰ 『へ雨宮風宮』出儘略縁起』（十返舎一九作画、岩戸屋、寛政十年刊）
- ⑱ 『風見艸婦女節用』（曲亭馬琴、北尾重政、蔦屋、寛政十一年刊）
- ⑲ 『へ通 寓言 愚 妄作』金世界 揃 能艶』（沈醉中美明、子興、榎本屋板、寛政十二年刊）
- ⑳ 『へ白雨や田を三囲の』開帳噺』（十返舎一九作画、西村屋板、寛政十二年刊）
- ㉑ 『へ艸荘子五蝶夢』式亭三馬自惚鏡』（式亭三馬、歌川豊国、西宮板、享和元年刊）
- ㉒ 『へ延命長尺』御詠 染長寿小紋』（山東京伝、喜多川歌麿、蔦屋板、享和二年刊）
- ㉓ 『へ金降豊歳貢』（白銀台一丸、子興、岩戸屋、享和二年刊）
- ㉔ 『へ老実製法滑稽妙劑』親讐 勝膏葉』（式亭三馬、歌川豊広、西宮板、文化二年刊）

二、 図像の比較

まず、〈天の主宰者〉の顔や衣装の形態（図像の型）を整理すると、主に次のA〜Cのような三種の型に分

けられる。

A. 日輪型の頭に袍姿

B. 金冠を頂いた垂髪に袍姿

C. 唐土の皇帝風の装束姿

これらの型に該当する作品と画像の形成について述べる。各型の作例は刊行年順に並べ、表記を簡略化するため、作者、画工、刊行年は割注で示し、板元と外題の角書は省略した。また、各型の例の画像も提示した。

A. 日輪型の頭に袍姿 (以下、十一作品)

- ② 『天道大福帳』 (明誠堂喜三二、北尾政美、天明六年刊)
- ⑧ 『先開梅赤本』 (山東京伝、北尾重政、寛政五年刊)
- ⑩ 『旨趣向棚牡丹餅』 (樹下石上、北尾政美、寛政六年刊)
- ⑬ 『心学晦荘子』 (曲亭馬琴、北尾重政、寛政七年刊)
- ⑮ 『加古川本蔵綱目』 (曲亭馬琴、北尾重政、寛政九年刊)
- ⑯ 『実生金栄花鉢植』 (樹下石上、歌川豊国、寛政十年刊)
- ⑰ 『出儘略縁起』 (十返舎一九作、寛政十年刊)
- ⑱ 『風見艸婦女節用』 (曲亭馬琴、北尾重政、寛政十一年刊)
- ⑲ 『金世界掬能艶』 (沈醉中美明、子興、寛政十二年刊)
- ⑳ 『金降豊歳貢』 (白銀台一丸、子興、享和二年刊)
- ㉔ 『親鸞跨膏葉』 (式亭三馬、歌川豊広、文化二年刊)

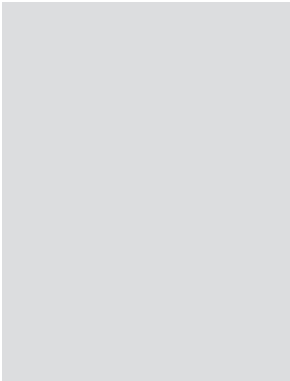


図 3
A 『天道大福帳』
5丁ウ
人間文化研究機構
国文学研究資料館
所蔵

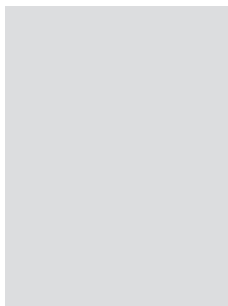


図5『天慶和句文』
3丁オ国会図書館蔵

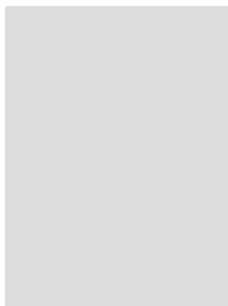


図4『三太郎天上廻』
6丁ウ国会図書館蔵

山口剛氏は、『天道大福帳』の「天道」の姿について、「造物主を意味する天道様を絵に現はすために、丸を描いて日輪に象り、それを首として、また天道をきかすために浄衣を着せた」と述べている。先に確認した通り、十八世紀ごろはすでに天道という名が太陽や（天の主宰者）の意味を持っていたことから日輪型の頭を表現するに至ったと考えられる。

ただし、生物でないものが擬人化され、その頭部にそのものを表した登場人物は以前にも例があった。例えば、恋川春町作画『化物大江山』（鱗形屋孫兵衛板、安永五年刊）では蕎麦やうどんの葉味がそれぞれ頼光伝説の登場人物に置き換わるが、胴体は人で頭が陳皮や大根などのまま描かれている。同作画『乱闘戦新根』（同板、安永七年刊）でも、「木の切口ふといの根」や「鯛の味噌ず」といった当時草双紙で頻繁に取り入れられた流行語が擬人化され、人の胴体に木の根や腕の頭などが描かれている。これら擬人化された登場人物には、付喪神のごとく目や口も描きこまれているが、顔が書かれていない例もある。先行研究では喜三二作『三太郎天上廻』（鳶屋板、天明三年刊）において三太郎が宗匠天を廻ったところで登場する「六月」や「日のあし」、京伝作『天慶和句文』に登場する「村雲」などがそれとされてきた。これらの登場人物は『天道大福帳』の「天道」に直接的な影響を与えたと言えなくとも、草双紙における擬人化の一つの表現として確立し、「天道」の下敷きになっていたと考えられよう。

ちなみに、目や口、鼻などの顔の部位を描かない表現は、日本古来の神の造形にも関係がある。山本陽子氏によると、そもそも日本古代において神は見てはならず、偶像することも許されていなかったが、仏教文化とともに仏像が日本に入ること、「神を形象化しようとする気運」が生じたという。それから神仏習合の思想が浸透していき、平安末期から鎌倉・室町初期になると、神道曼荼羅が制作されるようになる。これにより、本地仏として仏菩薩姿を描く以外に、男神は束帯姿の、女神は唐風装束姿の垂迹神が描かれるようになったという。ただし、建物や動物を描くことで神の姿に置き換えたり、『春日権現記絵』や『信貴山縁起絵巻』のように、姿を直接描かないで神を表現したりする方法も編み出されたようだ。⁽²⁹⁾

このように、神の「形象化」の半面、見てはならない風習があったことを踏まえると、『天道大福帳』の「天道」の頭も、日輪という自然物に置き換えられることで、日本の伝統的な神の描き方に沿った親しみやすい図像になったといえるだろう。そして、それは「天」という言葉の背景にある神や自然の理といった抽象的で複雑な思想概念を表現するにも適していたと考えられる。

B. 金冠を頂いた垂髪に袍姿（以下、七作品）

- ① 『天慶和句文』（山東京伝、北尾政）
（演、天明四年刊）
- ② 『大仏左掬』（白山人可候、署名）
（ナシ、天明六年刊）
- ③ 『心学早染艸』（山東京伝、北尾政）
（美、寛政二年刊）
- ④ 『世上洒落見絵図』（山東京伝、北尾政）
（演、寛政三年刊）
- ⑤ 『天道浮世出星操』（式亭三馬、歌川豊）
（国、寛政六年刊）
- ⑥ 『式亭三馬自惚鏡』（式亭三馬、歌川豊）
（国、享和元年刊）

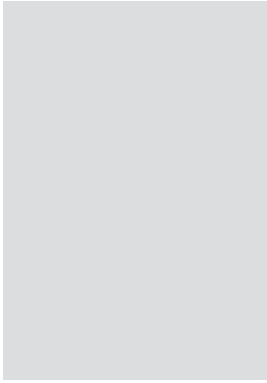


図6
B『心学早染艸』3巻2丁オ
国会図書館蔵

黄表紙で描かれるB像（図6）は前章でも挙げた『通言神代卷』や『大千世界牆の外』にも見られる。この図像の成立に関しては、鳥羽重宏氏が詳しく述べている。まず、本地垂迹説によって束帯や唐風装束姿の神が登場し、近世になって天照大神像が金冠垂髪白袍姿の兩童子の形で描かれるようになった。そして、その天照大神像が草双紙に登場する神々の姿に影響を与えたというのだ。⁽³⁰⁾したがって、京伝の『天慶和句文』の「天道」像も太陽を司る既成の天照大神像からとったということは想像に難くない。

ちなみに、玉華子編『真草三行音訓両點』萬歳節用字宝蔵（宝暦十三年（一七六三）刊）や『都會節用百家通』（寛政八年刊）、東嬰子編『玉海節用字林藏』（文政元年（一八一八）刊）など、絵入りの節用集にも天地開闢の始の神として同じような垂髪に袍姿の国常立尊が描かれている。⁽³¹⁾このような事例から、神の姿が垂髪に袍姿であるという認識は当時一般庶民の間に浸透していたと考えられる。

C. 唐土の皇帝風の装束姿（以下、六作品）

- ④ 『延寿反魂談』（山東京伝、北尾政演、寛政元年刊）
- ⑤ 『藍返行義霰』（山東京伝、兎角亭筆毛、寛政二年刊）
- ⑨ 『大仕掛三界曾我』（鹿杖山人、歌川豊国、寛政五年刊）
- ⑫ 『善悪邪正大勘定』（唐来参和、北尾重政、寛政七年刊）
- ⑬ 『御膳浅草法』（十返舎一九作、寛政八年刊）
- ⑭ 『開帳噺』（十返舎一九作画、寛政十二年刊）

天界物の黄表紙に影響を与えた心学や天文学などの「天」の思想がもと唐土から輸入されたことを踏ま

② 『御詠染長寿小紋』（山東京伝、喜多川歌麿、享和二年刊）

えれば、天の世界を統べる者、あるいは異国（異界）を治める者の象徴として唐土風の姿を借りて描かれたのも自然の流れであつたらう。実際、土佐秀信『増補諸宗仏像図彙』（天明三年成立）に唐土風の衣装をまとった神仏が複数描かれているが、その中には「日輪」を司るものもある。

三．呼び名の比較

次に、二十四作品の中で〈天の主宰者〉が「天道」と、「天帝」のどちらで呼ばれているかを分類した。

【天道（計：十四件）】

- ① 『天慶和句文』（山東京伝、北尾政演、天明四年刊）
- ② 『天道大福帳』（朋誠堂喜三、北尾政美、天明六年刊）
- ★③ 『大仏左掄』（白山人可候、署名ナシ、天明六年刊）
- ⑧ 『先開梅赤本』（山東京伝、北尾重政、寛政五年刊）
- ⑩ 『旨趣向棚牡丹餅』（樹下石上、北尾政美、寛政六年刊）
- ★⑬ 『心学晦荘子』（曲亭馬琴、北尾重政、寛政七年刊）
- ⑮ 『加古川本蔵綱目』（曲亭馬琴、北尾重政、寛政九年刊）

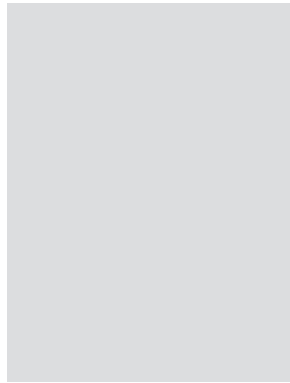


図 7
C『藍返行義殿』5丁ウ
国会図書館蔵

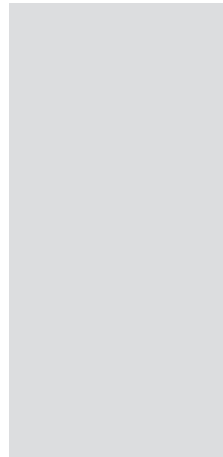


図 8
『増補諸宗仏像図彙』
国会図書館蔵（部分）

⑩ 『実生金栄花鉢植』（樹下石上、歌川豊）
（寛政十年刊）

⑪ 『出儘略縁起』（十返舎一九作）
（寛政十年刊）

⑫ 『風見艸婦女節用』（曲亭馬琴、北尾重）
（寛政十一年刊）

⑬ 『金世界揃能艶』（沈酔中美明、子）
（興、寛政十二年刊）

☆⑭ 『式亭三馬自惚鏡』（式亭三馬、歌川豊）
（興、享和元年刊）

⑮ 『金降豊歳貢』（白銀台一丸、子）
（興、享和二年刊）

⑯ 『親讐勝膏薬』（式亭三馬、歌川豊）
（興、文化二年刊）

【天帝（計：十二件）】

★⑰ 『大仏左捻』（白山人可候、署名）
（ナシ、天明六年刊）

⑱ 『延寿反魂談』（山東京伝、北尾政）
（演、寛政元年刊）

⑲ 『藍返行義叢』（山東京伝、兎角亭）
（龜毛、寛政二年刊）

右記の結果を見ると、「天道」と「天帝」の使用頻度はほとんど変わらない。しかし、今回取り上げた黄表紙の中には、作中での呼び名が一定でない例（★☆）もあり、戯作者自身も混同することがあったと考えられる。例えば、★をつけた『大仏左捻』と『心学晦荘子』は、作中で「天道」と「天帝」とを両用している。

『大仏左捻』⁽³²⁾

・まづ何にもしろ天道様へ知らせずばなるまいと（四丁オ）

・ひとへに大仏様のおかげなりと天帝大きに喜び給ひ、馳走せんと星ども大騒ぎする（七丁ウ）

⑳ 『心学早染艸』（山東京伝、北尾政）
（美、寛政二年刊）

㉑ 『世上洒落見絵図』（山東京伝、北尾政演、）
（萬屋板、寛政三年刊）

㉒ 『大仕掛三界會我』（鹿杖山人、歌川豊）
（興、寛政五年刊）

㉓ 『天道浮世出世星操』（式亭三馬、歌川豊國、）
（西宮屋板、寛政六年刊）

㉔ 『善悪邪正大勘定』（唐来参和、北尾重）
（興、寛政七年刊）

★⑳ 『心学晦荘子』（曲亭馬琴、北尾重）
（興、寛政七年刊）

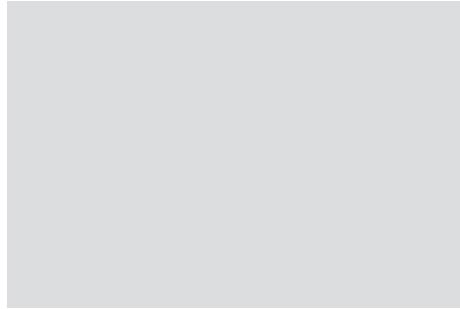
㉕ 『御膳浅草法』（十返舎一九作）
（興、寛政八年刊）

㉖ 『開帳嘶』（十返舎一九作、）
（興、寛政十二年刊）

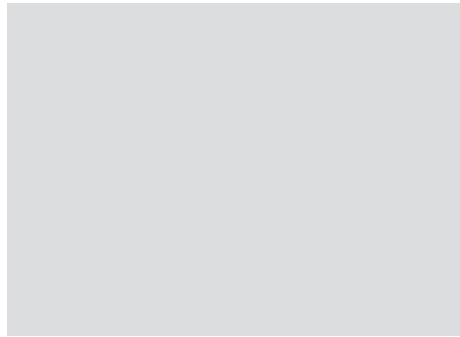
☆㉗ 『式亭三馬自惚鏡』（式亭三馬、歌川豊）
（興、享和元年刊）

【その他（計：一件）】

㉘ 『御詠染長寿小紋』（山東京伝、喜多川）
（興、享和二年刊）



3 丁ウ 4 丁オ：
中央の人物の胸部に「天照」の字



13 丁ウ 14 丁オ：
中央の人物の左腕に「天帝」の字
図9『式亭三馬自惚鏡』国会図書館蔵

『心学晦荘子』⁽³³⁾

・天照様の明らかなるご
意見^{いけん}を詳しくなされて

(十四丁ウ)

・朝比奈^{あそいな}は天帝^{てんてい}の前^{まえ}でも

大あぐらをかいてゐる

が(十五丁オ)

また、☆の『式亭三馬自惚

鏡』についても、

・留守^{るす}だくといふ内^{うち}に、

ずつと入る三人^{さんにん}連^づれは、

思^{おも}ひもよらぬ天^{てん}道^{どう}様^{さま}と竜^{りゆう}宮^{きゆう}の親^{おや}玉^{たま}難^{なん}陀^だ龍^{りゆう}王^{わう}、地^ち獄^{ごく}の大人^{おとな}閻^{えん}魔^ま大^{だい}王^{わう}なり(三丁ウ)⁽³⁴⁾

とあるように、本文には「天^{てん}道^{どう}様^{さま}」を用いるが、図9に描かれる〈天^{てん}の主^{しゅ}宰^{さい}者^{しや}〉の衣^い服^{ふく}には「天^{てん}照^{しやう}」(四丁オ)や「天^{てん}帝^{てい}」(十三丁ウ)の文字^{ぶんじ}が書^かき込^こま^まれ^れて^てい^いる。本^{ほん}作^{さく}は「天^{てん}道^{どう}」と「天^{てん}照^{しやう}大^{だい}神^{しん}」、「天^{てん}帝^{てい}」を同^{どう}一^{いつ}視^しして^てい^いた^たこ^こを^を示^しす^す貴^き重^{じゆう}な^な例^{れい}とい^いえ^えよ^うう。

四. 図^ず像^{ざう}と呼^よび名^なの組^ぐみ合^あわせ

次の表は先の図像と呼び名の比較結果を合わせたものである。

まず、縦列の図像でみると、Aの多くが「天道」であり、「天帝」の呼び名がつくのは「天道」との両用が見られる『心学晦荘子』のみであった。しかし、Bで「天道」の呼び名がつくのは『天慶和句文』と『大仏左掄』、『式亭三馬自惚鏡』の三作だけで、しかも『天道大福帳』以後の刊行ということであれば、絵と本文で呼び名に混同があった『式亭三馬自惚鏡』のみである。Cで「天道」の例は今回見当たらなかった。次に横行の呼び名でみると、「天道」は先述した通りAの例が多く、一方の「天帝」はBの垂髪に袍姿やCの唐土の皇帝風の装束姿の例が多かった。Bで描かれる②『御詠染長寿小紋』は調査の限り、『天慶和句文』以降で唯一別名がつけられた例であった。

このことから、Bに関しては呼び名にある程度揺れがあるが、Aは『天道大福帳』の登場以降、ほとんどが「天道」と呼ばれていたと分かる。『天道大福帳』の天道の影響の大きさがここに見られよう。また、Cが「天帝」の呼び名のみ付けられていることも踏まえると、Bはどちらの呼び名でも使われ、AとCの中間に位置づけられる図像であったと考えられる。

ここで、画工についても補足しておく。A～Cの〈天の主宰者〉像はいずれも当時草双紙の画師として活躍していた北尾重政と政美（後の鋤形蕙齋）³⁵が手掛けたものが多い。同じ北尾派であった山東京伝も、画工政演として「天道」や「天帝」の呼び名の登場人物を描いているが（①④⑦）、A像で「天道」を描いている例は現段階での調査では見えない。

草双紙における作者と画工の関係については、式亭三馬『腹之内戯作種本』（文化八年（一八一二）刊）で「作者は太夫にて画師は三味せんひきなり」と表現されるほど、互いの息を合わせなければならないものであ

いた垂髪に袍姿	A. 日輪型の顔なし頭に袍姿	
<p>★② 『式亭三馬自惚鏡』</p> <p>★③ 『大仏左掬』 (白山人可候、署名) (ナシ、天明六年刊)</p> <p>① 『天慶和句文』 (山東京伝、北尾政演、) (鶴屋板、天明四年刊)</p> <p>② 『親讐勝負薬』 (式亭三馬、歌川豊広、) (葛屋板、文化二年刊)</p> <p>③ 『金降豊歳貢』 (岩戸屋、享和二年刊)</p> <p>④ 『金降豊歳貢』 (白銀台一丸、子興、)</p> <p>⑤ 『金降豊歳貢』 (沈酔中、美明、子興、) (本屋板、寛政十一年刊)</p> <p>⑥ 『風見艸婦女節用』 (曲亭馬琴、北尾重政、) (葛屋板、寛政十一年刊)</p> <p>⑦ 『出儘略縁起』 (戸屋、寛政十年刊、岩)</p> <p>⑧ 『実生金栄花鉢植』 (樹下石上、歌川豊国、) (西宮板、寛政十年刊)</p> <p>⑨ 『加古川本蔵綱目』 (曲亭馬琴、北尾重政、) (鶴屋板、寛政九年刊)</p> <p>★⑩ 『心学晦荘子』 (曲亭馬琴、北尾重政、) (鶴屋板、寛政七年刊)</p> <p>⑪ 『旨趣向棚牡丹餅』 (樹下石上、北尾政美、) (西宮屋板、寛政六年刊)</p> <p>⑫ 『先開梅赤本』 (山東京伝、北尾重政、) (葛屋板、寛政五年刊)</p> <p>⑬ 『天道大福帳』 (朋誠堂喜三、北尾政美、) (葛屋板、天明六年刊)</p> <p>天道 (計…十四件)</p>	<p>★⑬ 『心学晦荘子』 (曲亭馬琴、北尾重政、) (鶴屋板、寛政七年刊)</p> <p>天帝 (計…十二件)</p>	
<p>⑦ 『世上洒落見絵図』 (山東京伝、北尾政演、) (葛屋板、寛政三年刊)</p> <p>⑥ 『心学早染艸』 (山東京伝、北尾政美、) (大和田板、寛政二年刊)</p> <p>★③ 『大仏左掬』 (白山人可候、署名) (ナシ、天明六年刊)</p> <p>⑦ 『世上洒落見絵図』 (山東京伝、北尾政演、) (葛屋板、寛政三年刊)</p>		<p>★⑬ 『心学晦荘子』 (曲亭馬琴、北尾重政、) (鶴屋板、寛政七年刊)</p> <p>天帝 (計…十二件)</p>
<p>↓ 『天地造化の神』 の名</p> <p>② 『御詠染長寿小紋』 (山東京伝、喜多川歌麿、) (葛屋板、享和二年刊)</p>		<p>その他 (計…一件)</p>

C. 唐土の皇帝風の装束姿	B. 金冠を頂
	<p>(式亭三馬、歌川豊國、西宮板、享和元年刊)</p>
<p>④ 『延寿反魂談』(山東京伝、北尾政演、榎本屋板、寛政元年刊)</p> <p>⑤ 『藍返行義霰』(山東京伝、兎角亭龜毛、大和田板カ、寛政二年刊)</p> <p>⑨ 『大仕掛三界曾我』(秩父屋板、歌川豊國、寛政五年刊)</p> <p>⑫ 『善悪邪正大勘定』(唐来参和、北尾重政、萬屋板、寛政七年刊)</p> <p>⑭ 『御膳浅草法』(十返舎一九作、寛政八年刊)</p> <p>⑳ 『開帳噺』(十返舎一九作、西村屋板、寛政十二年刊)</p>	<p>① 『天道浮世出星操』(式亭三馬、歌川豊國、西宮屋板、寛政六年刊)</p> <p>★⑳ 『式亭三馬自惚鏡』</p> <p>(式亭三馬、歌川豊國、西宮板、享和元年刊)</p>

ったといわれる⁽³⁶⁾。井上氏は「予め計算された筋と絵を組みたて⁽³⁷⁾るにあたって、「作者と画工のあいだに、微妙なまでの得心が必要になってくる」と述べる。したがって、喜三三は黄表紙において自ら画を描くことはなかったが、『天道大福帳』の「天道」の描写は本作中でも肝心なところであったため、その発想については何らかの意向が加わっていた可能性もある。ただ、〈天の主宰者〉像を描いたのは北尾派に多く、特定の画工にある程度集中していたことを踏まえると、やはり画工は「天道」と「天帝」の造形において重要な位置にいたのである。特に『天道大福帳』も『心学早染艸』も手掛けた政美の存在は大きく、後に『鳥獣略画式』(寛政九年刊)などを手掛けた政美の意匠の才能を『天道大福帳』の天道にも見ることができよう。

重政、政美と政演の仲について、小池藤五郎氏は「重政を中心とする政演、政美、俊満の三文化人グループは、心あたたまる関係を終生つづけていた⁽³⁸⁾」と説明する。また、政演と政美について、棚橋氏は次のように述べる。

喜三二の『天道大福帳』は、山東京伝と同門の浮世絵師北尾政美が画工をつとめていた。仲の良い兄弟弟子の画工北尾政美は京伝の意を酌み、そのアイデアを『天道大福帳』でよく具現化してみた。それをさらに漫画チックに、天道様を天帝に変えて、天帝をシャボン玉を吹く人間の姿としたのは京伝のアイデアであった⁽³⁹⁾。

つまり、〈天の主宰者〉像が『天慶和句文』から『天道大福帳』へ、そして『天道大福帳』から『心学早染艸』へと互いに呼応しあいながら形成されていったということであるが、それは戯作者として京伝と喜三二、画工として政演と政美が互いに刺激しあった結果ということであった。したがって、今回比較した「天道」や「天帝」は、黄表紙に描かれる登場人物が一つの作品の中で完成、完結しているのではなく、常に発展する可能性をほらむものであったことを示す例だといえる。

五、喜三二と京伝の戯作意識

ここで、改めて京伝作に描かれる〈天の主宰者〉の変遷を見ていく。京伝は『天慶和句文』の〈天の主宰者〉にBの姿で「天道」の名をつけたが、『心学早染艸』で同じような姿でありながら「天帝」という名に変えた。また、『天慶和句文』から『心学早染艸』の間には『延寿反魂談』を刊行したが、その「天帝」の衣装

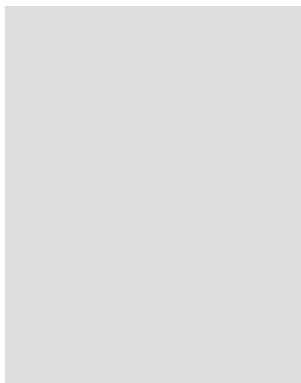


図 11 『先開梅赤本』
3丁ウ国会図書館蔵

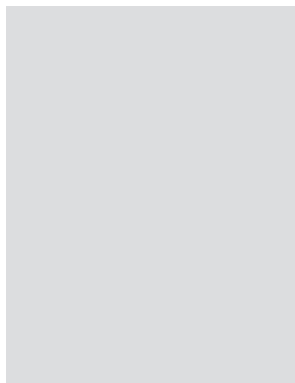


図 10 『延寿反魂談』1丁オ
国会図書館蔵

は、Cの唐土の皇帝風の姿を意識したものであり、『心学早染艸』と同年刊行の『藍返行義叢』の「天帝」も二章で例に示したC像（図7）である。

京伝は「天帝」という名の登場人物を生み出した当初、その名のイメージから〈天の主宰者〉を唐土の皇帝の姿で創作したと考えられるが、その後、以前『天慶和句文』で登場させた垂髪、袍姿の神を再使用したことで、より日本の神像に沿った『心学早染艸』の「天帝」を生み出すこととなる。ここに、京伝が喜三二の「天道」とは異なる像の〈天の主宰者〉を生み出すための模索をしていたことがうかがえよう。

今回調査した作品の範囲において、京伝が人の姿で「天道」という名を用いたのは『天慶和句文』のみで、『天道大福帳』刊行後に「天道」という名を自身の作品に用いた『先開梅赤本』では、『天道大福帳』以来の天道の姿を用いている。

そもそも、京伝にとって、黄表紙で評判をとった先駆者として、その地位を揺るぎないものとしていた喜三二は憧憬を抱く対象であった。四方山人（大田南畝）作の絵草子評判記『菊寿草』や『岡目八目』では、いずれも作者の筆頭に喜三二の名が挙がっていたし、京伝も『客人女郎』の中で「北尾の風流、勝川の似顔、清長の当世に目をおどろかせ、はる町喜三二の戯作におもしろさ

うら山しきことに思ひ、何とぞあづまへ下りが同の名を上ん⁽⁴⁰⁾と語っている。

また、葛屋重三郎が初めて売り出した黄表紙の一つに喜三三作『廓花扇観世水』(安永九年刊)があったが、この作品の画工は政演であった。棚橋氏は「喜三三の助言や指示等を得てのことであつたらうが、新進画工政演の記念すべき黄表紙と云つても過言ではな⁽⁴¹⁾」いと述べ、後年の京伝作の黄表紙や洒落本にその影響が見られることを指摘している。戯作者としてはまだ新人で本業の画師としての方が名の通つていた政演が、画工の立場で喜三三の制作過程に接していたことは事実であり、そこから学ぶこともあつたに違いない。

さらに、喜三三と京伝のつながりは黄表紙だけでなく、当時最盛期を迎えていた天明狂歌壇の活動中にも見られる。例えば、『狂文宝合記』(天明三年刊)の画工は政演と政美であるが、手柄固持こと喜三三が用意した「蛭之茶羅鞍 焼ヶ場之太刀」の絵も政演であつた⁽⁴²⁾。

このような戯作者のつながりを踏まえた上で、改めて喜三三の「天道」と、京伝が描いた『天慶和句文』の「天道」や『心学早染艸』の「天帝」の関係を考えると、やはり、京伝は〈天の主宰者〉を自身の作に登場させる時、『天道大福帳』以来の「天道」を意識せざるを得なかつたと思われる。

『天道大福帳』の刊行以降、京伝は少なくとも「天道」の名を作品に用いるときには『天道大福帳』のようなA像の姿をとり、その他作品の趣向に合わせて〈天の主宰者〉を登場させる際には、「天帝」や「天地造化の神」など、「天道」とは異なる名にするようにしたのでないだろうか。

現段階の調査の中では、寛政五年に刊行された京伝作『先開梅赤本』が『天道大福帳』の「天道」を他の戯作者が採用した初例であるが、その翌年には、『天道大福帳』が再版されるだけでなく、次々と『天道大福帳』以来の天道が他作品に登場するようになった。このことから、『先開梅赤本』の存在も『天道大福帳』の「天

道」ブームの誘因の一つとなった可能性はある。前章の分類結果から、喜三二の『天道大福帳』刊行の反響が大きかったことにより、〈天の主宰者〉のことを「天道」と名付ければ日輪型の頭に袍姿で示し、「天帝」とすれば人の姿で描くよう、後続の草双紙では次第に使い分けがなされていったといえよう。

終わりに

ここまで、複数の黄表紙に登場する「天道」や「天帝」の名を持つ〈天の主宰者〉を比較し、図像と呼び名に見られる傾向からその差異について考察し、〈天の主宰者〉像の変遷を見てきた。

今回取り上げた黄表紙の範囲においてではあるが、図像には日輪型の頭に袍姿（A）や垂髪に袍姿（B）、唐土の皇帝風の装束姿（C）の三種が主に見られた。その中で、Aは『心学晦莊子』による混同の例があるものの、「天道」の呼び名が、Bは「天帝」と「天道」両方の呼び名が、Cは「天帝」の呼び名が付けられる傾向にあることが分かった。また、AやBに見られる作中での呼び名の混同などから、〈天の主宰者〉の描き分けは初めから明確に認識されていたわけではなく、天界を描いた黄表紙が複数刊行された過程で次第に区別されていくようになったといえる。特に、棚橋氏が指摘されたように、『天慶和句文』から『天道大福帳』、そして『心学早染艸』に至るまでの変遷において、喜三二と京伝が戯作者として互いに意識していたことは、京伝が『心学早染艸』の「天帝」という同じく後続作品に影響を与えるような登場人物を完成させるまでに、図像や呼び名が異なる様々な〈天の主宰者〉像を登場させていたことから推察できる。

今回は『天道大福帳』の「天道」が後続の黄表紙に影響を与えるほどの登場人物であったことから〈天の主

「宰者」像に着目したが、そこで明らかになった変遷は、黄表紙に描かれる登場人物が常に発展しながら後続作品へと繋がっていくものであった可能性を示しているといえよう。

最後に、『天道大福帳』の「天道」像がなぜそこまで人々の心を惹きつけたのかという点について改めて所見を述べておく。まず、天明期の黄表紙において「天」を具象化した登場人物が描かれたことから、庶民にとって「天」の存在がより身近なものになっていたと考えられる。様々な表現方法によって「天」に纏わる登場人物が生み出される中で、『天道大福帳』の「天道」はひと際強い個性を放っていたといえよう。頭が日輪そのもので、顔から感情を読み取ることにはできないが、それが伝統的な神の描き方に類似して〈天の主宰者〉としての神秘性を備えさせている。その一方で、人間的な仕草をさせているために、顔がないのにも関わらず表情豊かなように見える。こうした神秘性とのギャップが「天道」にユーモアや愛らしさを与えており、人々を惹きつける登場人物となっている。空（太陽）、天の摂理、〈天の主宰者〉といった多義的で抽象的ともいえるような天道という名を表しつつ親しみを感じさせるのに、本作の「天道」は実に画期的な図像を与えられていた。

註

- (1) 二世竹田出雲・三好松洛・並木千柳作／寛延元年(二七四八)八月、大坂・竹本座初演。(1)藤村作編『増補改訂日本文学大辞典』五卷(新潮社、一九六一年、一八二頁、小池藤五郎記)(2)小池正胤、宇田敏彦、中山右尚、棚橋正博編『江戸の戯作絵本』続巻二(社会思想社、一九八五年、宇田敏彦解説、五五頁、五七頁)は、本作中の『仮名手本忠臣蔵』六、七段目を描いた場面について、天明三年中村座『忠臣蔵』の興行を写したと説明する。『仮名手本忠臣蔵』六、七段目を描いた場面について、天明三年中村座『忠臣蔵』の興行を写したと説明する。『仮名手本忠臣蔵』六、七段目を描いた場面について、天明三年中村座『忠臣蔵』の興行を写したと説明する。『仮名手本忠臣蔵』六、七段目を描いた場面について、天明三年中村座『忠臣蔵』の興行を写したと説明する。『仮名手本忠臣蔵』六、七段目を描いた場面について、天明三年中村座『忠臣蔵』の興行を写したと説明する。

蔵』の興行との関連については注六でも補足する。

- (2) (1)藤村注一(1)書(一八二頁、小池記)「全智全能であるべき天帝天人に人間的の失策を興へて哄笑させる心にくさ、熊手によって人間界と交渉する滑稽さも見るべきである」(2)注一(2)書(宇田解説、七五頁)「天上界の神々に神らしからぬ失敗をさせるなどの滑稽を描いて、生身の人間臭いものとしているところにある」による。

- (3) 棚橋正博『黄表紙総覧』前編(青裳堂書店、一九八六年、六三三頁)

- (4) 曲亭馬琴著、徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』(岩波文庫、二〇一四年)

- (5) (1)井上隆明『喜三二の戯作本の研究』(三樹書店、一九八三年、九八頁)、(2)注一(2)書(宇田解説、七六頁)による。金銀星が話題となった事件を記録する例に、斎藤月岑『武江年表』巻之六(嘉永三年(一八五〇)刊)には「七月時分、金銀星といふがあらはると評判す。其の星を見るに、金星といふは心宿、銀星いふは太白星にて、異なるにあらず。一時の妄言也」(『増訂武江年表1』、東洋文庫、一九八二年、二〇四頁引用)が挙げられる。

- (6) (1)藤村注一(1)書(一八二頁、小池記)、(2)注一(2)書(解説、四二頁)、(3)棚橋注三書(六三三頁)(4)伊原敏郎『歌舞伎年表』第四卷(岩波書店、一九五六年、三九四、四〇二頁)参照。『忠臣名残蔵』は安永九年五月の市村座騒動を受けて、五代目團十郎が三代目尾上菊五郎のためかけた名残狂言。ただし、注一(2)書(宇田解説、七六頁)は、本作が本興行を意識したものにしては「時宜を失した感」があり、これとは別に天明四年に起きた佐野善左衛門による田沼意知刃傷事件(七曜紋事件)を踏まえた可能性も示唆する。この刃傷沙汰は「屋物ブーム」に影響したと井上注五(1)書(九八頁)は説明しており、本作との関連も示す。

- (7) 小池正胤、宇田敏彦、中山右尚、棚橋正博編『江戸の戯作絵本』(全盛期黄表紙集(教養文庫、一九八一年、棚橋解説、五七頁))

- (8) (1)棚橋正博『山東京伝の黄表紙を読む』(ぺりかん社、二〇二二年五月、六二頁)「幕府の正学である朱子学の儒教思想による人心教化政策と心学は抵触しないことから、一種の道徳教育として幕府は心学を利用するところがあり大流行した」(2)井上隆明『江戸戯作の研究―黄表紙を主として』(新典社、一九八六年、六一頁)「心学では心を天とするゆえ。石門心学の時好は黄表紙の天界物を盛んにした」による。

- (9) 本文は国会図書館蔵本 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892923> を参照した。

- (10) 本文は国会図書館蔵本 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892983> を参照した。
- (11) (1)山口剛「黄表紙繪趣向推移の一様式」『山口剛著作集』第三、中央公論社、一九七二年三月、四六七頁。(2)小池正胤、宇田敏彦、中山右尚、棚橋正博編『江戸の戯作絵本』(三)変革期黄表紙集(教養文庫、一九八二年、中山解説、二八三頁)。(3)棚橋注三書中編(一九八九年、一四頁―一二八頁)。(4)その他、善魂悪魂に影響を与えたものとして、『天慶和句文』の「よびひ星」(小池藤五郎『山東京傳の研究』岩波書店、一九三五年、二五五頁)や、『間違曲輪遊』、『時代世話二挺鼓』に描かれる心字の魂(棚橋注八〇書、七十一―七十七頁)、歌舞伎の演出である「魂魄」(関原彩「草双紙における魂図像の変遷」『心学早染艸』善玉悪玉の図像の成立まで)、『日本文学』六十四卷九号、二八―三八頁、二〇一五年)など、様々なものが指摘されている。
- (12) (1)棚橋注八〇書(六六頁)。(2)棚橋正博「黄表紙の研究」近世文学研究叢書5(若草書房、一九九七年、一三六頁)
- (13) 森田武編『邦訳 日葡辞書索引』(岩波書店、一九八九年、六四七頁)
- (14) 森田武注一三書(六四四頁)
- (15) 清水茂校注「童子問」(日本古典文学大系九七『近世思想家文集』、岩波書店、一九六六年、一一〇頁)
- (16) 安部清哉「太陽」語彙考(国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』十、一九八九年、一三九頁、一四二頁)
- (17) 石田瑞麿著『例文仏教語大辞典』(小学館、一九九七年)「仏の教えを奉ずる者。仏教者。浮屠者とも。*元亨釈書八・昭元「賛曰、舍利者孔老之書無レ聞。唯浮屠氏而已」とある。
- (18) 谷川士清著『和訓栞』二卷(成美堂、一八九八年、三五二頁)参照。尚、旧字体は新字体にして表記する。
- (19) 森田武注一三書(六四七頁)
- (20) 大久保正校注「玉くしげ」(日本古典文学大系九七『近世思想家文集』、岩波書店、一九六六年、三二五―三二六頁)参照。尚、旧字体は新字体にして表記する。
- (21) 大久保注二〇書(三二六頁)脚注七では「天の道理。または天地を主宰する神」と両義で取っている。
- (22) 『通言神代卷』一丁オに「日本くさわけのおや玉にて名を国とこ立のいこと、云ふ」とある。また、棚橋注三書(五六七頁)において、『大千世界牆の外』は「天道大福帳」に影響を与えた先蹤的作品に位置付けられる。
- (23) 国立国会図書館蔵、安政大地震の錦絵《要石を掘る人々》(作者不明) (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1304003>)

（二〇二二年二月二十六日検索）

- (24) 本文は注一(2)書、国文学研究資料館所蔵本を参照した。
- (25) 本文は国会図書館蔵本 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892682> を参照した。
- (26) 外題の表記は国会図書館蔵本による。国会図書館蔵本二冊の内、一冊（NDL請求記号：207-222）には「孔子稿後編」という角書がつく。棚橋注三書（二〇八頁）では『張かへし』行儀有良礼』の外題名で紹介される。
- (27) 山口注一一(1)論（四六七―四六八頁）
- (28) 見方によっては、雲の描線が目や鼻らしくも見えるが、『化物大江山』や『乱闘戦新根』とは明らかに異なり、あくまで雲の形のみで頭を表現している。
- (29) 山本陽子『絵巻の図像学』（勉誠出版、二〇二二年、三〇二頁）
- (30) 鳥羽重宏「天照大神の像容（イメージ）の変遷について——女性像・男体像から、兩宝童子像にいたる図像学」『皇学館大学神道研究所紀要』十三号一九九七年三月、一一九―一七九頁）
- (31) 『萬歳節用字宝蔵』：<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/100136500/viewer/29>
『都會節用百家通』：<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/200006409/viewer/50>
『玉海節用字林蔵』：<https://kotenseki.niji.ac.jp/biblio/100238350/viewer/1>
（国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース二〇二二年三月十九日検索）
- (32) 本文は国会図書館蔵本 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9893088> を参照した。
- (33) 本文は国会図書館蔵本 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892544> を参照した。
- (34) 注九参照。
- (35) 小池藤五郎『山東京伝』（吉川弘文館、一九六二年、一九四―一九六頁）参照。政演と政美は北尾重政を師とする同門の画師である。評判記『菊寿草』（天明元年（一七八二）刊）「絵師之部」では重政、清長、政演、政美の順に『岡目八目』（天明二年刊）では清長を筆頭に政演、政美の順に置かれていたほど、二人は画師として活躍ぶりが認められる存在であった。京伝は戯作を書き始めた当初は政演の名を用いる事が多く、『岡目八目』で黄表紙『御存商売物』が高く評価されるまで、戯作者というよりも画師北尾政演としての評判の方が先に確立していたという。

- (36) 中村幸彦『中村幸彦著述集』第四卷(中央公論社、一九八七年、五二四頁)
- (37) 井上注八⁽²⁾書(四八頁)
- (38) 小池注三五書(一三八頁)
- (39) 棚橋注八⁽¹⁾書(六六頁)
- (40) (1)浜田義一郎「山東京伝の天明三年の黄表紙 新資料『客人女郎』翻刻」(『大妻女子大学文学部紀要』四号、一九七二年三月、二八頁)(2)井上注六⁽¹⁾書、「朋誠堂喜三二年譜」(一五〇頁)
- (41) 棚橋注三書(二〇九頁)
- (42) 天明狂歌壇の動向、『狂文宝合記』に関しては、(1)和田博通「天明初年の黄表紙と狂歌」(『山梨大学教育学部研究報告』第三十一号、一九八〇年、第一分冊人文社会科学系)(2)浜田義一郎「宝合―安永・天明年間の江戸文学の一断面―」(『黄表紙おぼえ書』(浜田義一郎『江戸文芸攷』岩波書店、一九八八年)(3)延広真治編著『狂文宝合記』の研究(汲古書院、二〇〇〇年)(4)揖斐高『江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち』(吉川弘文館、二〇〇九年刊)を参照。

〔画像元〕

- 図1・5 『天慶和句文』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892491>
(国会図書館デジタルコレクション、二〇二一年三月二十日検索)
- 図2 『白雨や田を見圍の』開帳嘶』
<https://koteneki.niji.ac.jp/biblio/100054013/viewer/4>
<https://koteneki.niji.ac.jp/biblio/100054013/viewer/9>
(国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」、二〇二一年二月二十日検索)
- 図3 『天道大福帳』 <https://koteneki.niji.ac.jp/biblio/200005801/viewer/1>
(国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」、二〇二一年二月二十六日検索)
- 図4 『三太郎天上廻』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892486>

- 図6 『心学早染艸』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892682>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年二月二十六日検索
- 図7 『藍返行義載』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8929964>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年二月二十六日検索
- 図8 『増補諸宗仏像図彙』 <https://dl.ndl.go.jp/view/jpegOutput?itemd=info%3Andljp%2Fpid%2F3442143&commentNo=13&oupanScale=4>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年三月十三日検索
- 図9 『式亭三馬白惚鏡』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892923>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年二月二十六日検索
- 図10 『延寿反魂談』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542785>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年三月二十日検索
- 図11 『先開梅赤本』 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892763>
（国会図書館デジタルコレクション）
一〇二二年三月二十日検索

〔付記〕

・ 本稿を成すにあたり、図版掲載のご許可を賜りました諸機関に深く御礼申し上げます。
・ 本稿は、日本文学協会第三十九回研究発表集会（二〇一九年七月七日、於京都女子大学）において、口頭発表させていただきました。いただいたものであり、席上ご教示賜りました諸氏に厚く御礼申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、ご指導賜りました近世文学研究会（二〇一八年十一月十七日、於武蔵大学）の皆様にご心より感謝申し上げます。

A study of Kisanji Hosedo's *Aratani tatsumi Chushingura Tendo Daifukuchō*:
with special reference to "Tento"

FURUSHO, Rui

In this paper, by focusing on the name of "tento" in *Aratani tatsumi Chushingura Tendo Daifukuchō*, the all mighty God in heaven, we emphasize the following two points: i) how the "tento" influenced other *Kibyōshis*; ii) what the charming points of the "tento" are.

Tento Daifukuchō, one of the *Kibyōshis* (1786), was written by Kisanji Hosedo. Between the late period of Anei and the Tenmei period (c.1780–1789), as astronomical phenomena and *shingaku*, the learning of mind and heart, boomed and became popular, some *Kibyōshis*, the mighty god called "tento" or "tentei" appeared in some *Kibyōshis*. But the difference between "tento" or "tentei" has never been pointed so far.

By comparing the names and the appearances of "tento" and "tentei" in 24 works of *Kibyōshis*, we have clarified some tendencies and the transition in them.

So popular was the impressive appearance of Kisanji's "tento" that it was so often taken up in some other *Kibyōshis*. Therefore, we can safely say that this "tento" had a primary place in the history of *Kibyōshis*.

Also in this research, we have referred to the relationship between Kisanji and Kyoden, the author of *Shingaku Hanazonetsusa*.

(日本語日本文学専攻 博士後期課程三年)